

**【症例ジェイコブ】** [男児 年齢;治療開始時14歳9ヶ月]

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House  
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

- ・主訴:強迫的不安症状(扉の鍵及びガス栓の確認行為など)。学業面での集中力低下。
- ・家庭環境:両親は、家庭内別居状態。父親は猫たちと一階に、母親とジェイコブは2階に住む。父親は図書館員。読書三昧の暮らし。母親は教師で、パートタイム勤務。23歳の姉そして19歳の兄がいる。彼らは大學に籍がある。互いに家族的交流あり。

**■資料その1:ジェイコブについての紹介状;主治医Dr. Fitzpatrick宛**

(日付;1978年7月21日)

Dr. G. Fitzpatrick,  
Child Psychiatry,  
St. Georges Hospital,  
Blackshaw Road,  
Tooting, S.W.17

Dear Dr. Fitzpatrick,

この男子がわれわれのクリニックに紹介されてまいりましたのは、彼の母親が以前こちらで定期的にソーシャルワーカーとの面談を継続していたこともあり、それでこのソーシャルワーカーがこちらで一度ジェイコブに「診断面接」を受けさせてみてはどうかと考えましたからです。彼女は彼の母親である元患者とはここしばらく何ら接触を得てはおりませんが、彼女についての印象としてはかなり深刻な問題を抱えている女性といったふうに判断しております。

ジェイコブとその母親は1978年の6月14日 & 16日にわたしどもにお越しになっております。ジェイコブには4回面接が行われました。そのうち2回はわたしが担当しました「診断面接」でして、あとの2回は「心理テスト」が施されました。Mrs. R(彼の母親)はソーシャルワーカーによって2回面接が行われましたが、ジェイコブの父親とはこれまでわれわれは連絡をいたしておりません。彼は、ジェイコブと母親とは同じ家屋に住んでおりますものの、どうやら別居状態にあるようです。

ジェイコブは、姉と兄とがおりまして、どちらも家を出て大學に在籍しております。ジェイコブは彼らにそれほど頻繁ではないにしろ会っているようです。母方の祖母がかなり最近のこと、死んでおります。しかし父方の祖母はまだ健在であり、ごく最近まで近くに住んでいたもようです。家族はほとんど彼女に会う機会はなかったみたいですが・・・。

ジェイコブの母親はNorth Londonに於いてパートタイム勤務で教師をしております。教師として資格を得たのはそれほど遠い昔ではありません。父親は司書(librarian)でありまして、本に耽溺しているといえましょう。そして物書きやリサーチなどに没頭しているようであります。父親はまた猫を飼っていて、ひどく愛着しております。そしてごく最近のこと、転居ということも考えられたのですが、新しい家では猫たちの安全が懸念されるという理由で延期されたとのこと。両親間の関係は時として陰悪になるもようです。ジェイコブが面接を受けた際には父親は癌と判明され、それで終末医療が考えられていたわけです。しかしながら、その後彼は快復し、そして母親は彼の‘暮らしぶり’がどうにも我慢の限界だと思いうに至ったわけです。そこで家屋は大きく2つに分けられ、そしてジェイコブと母親は‘一緒に暮らす’ということになったわけです。(まるで夫と妻といったように、無論肉体的にということを除いてですが、‘彼らが一緒に暮らしている’ことの影響について彼は語っておりました。)

ジェイコブの不安は、取り分けて彼の学業成績にまつわるものです。彼は授業に集中できないと訴えます。誰もが授業に耳を傾け、それを取り入れ、それから宿題をするといった普通のことできない。自分には他の者の何倍も努力が要る。そして授業内容がうまく記憶されず、従って宿題が思うようにはかどらないと語っております。彼はこのことでひどく動揺をきたしており、そしてある程度、父親の極度に知的な興味に同一化しているようでもあります。彼の父親との関係性は極めてアンビヴァレントといえましょう。憧れでもあり、そしてある程度のところ彼の興味・嗜好を分かち合い、実際の行動を共にすることもありますが、同時に彼のことを難しい人、どちらかという‘まともではない人 insane’と捉えておるようです。

他に彼が訴えたところの不安症状を列挙しますと、まず彼はガス栓を閉めるのを忘れたのではないかということに不安がること。ミルク瓶に入っているものが大丈夫かどうか、毒が入ってはいないか、信用できないといった気分。そして自分が正面玄関の扉を開けっ放しにしたのではないか、それで猫が飛び出して、路上で車に轢かれはしないかといったことを恐れたり…。彼の不安は家庭内に限らず、学校でもいろいろと気に病む事があるということです。例えば、男の子がフットボールを紛失したということがあれば、彼はそれをひどく心配し、男の子のことではなくて、フットボールがそれでどうなったのかとかあれこれ気に病むわけです。それで遂にはその男の子に別のフットボールを買い与えてやるといったことまで考えたりするのです。こうした心配でやきもきすることが、学校で授業に集中しなくてはならない時や自宅で宿題する時に大いに妨げとなっていることになりましょう。

しかしながら、多くの面で彼は年齢相応の夢中になれるような興味・関心ごとがあります。フットボールの観戦にも出掛けますし、フットボールの競技にも参加します。「The Boys Brigade」の会員でもあります。そして友人たちと一緒にディスコにも出掛けるとのことです。彼の生活全般において、彼の強迫的不安に影響されない領域は多分にありそうに見受けられます。

心理テストの結果から見て、彼の言語的側面と非言語的側面との間での著しいずれが指摘されます。それは彼が語る不安について、多いに説明し得る何かかと思われます。言語的にはWISCで標準を超えております。非言語的テストにおいては、彼はほぼ標準並といえます。彼は自らの知的能力 intelligence に不安を覚えているようでした。そして字を書く際、能力的には特に問題はないわけですが、敢えてブロック体の大文字で綴りました。その理由は彼の書く字が‘ひどく汚い’からと言ひまして・・。人格検査(文章完成法、対人関係テスト)の方ですが、彼の強迫的な特徴、そして父親との関係性、そして彼の社会的能力との関連のいずれにおいても、面接においていろいろ語られていたことがさらに確認されたように見受けられます。

ジェイコブの面接において、彼の不安感について、例えばミルク瓶のこと、コインを飲み込んだこと、そして学習困難について、それらの繋がり・関連性が語られたわけですが、興味を覚えたようでありまして、それに対して返答することに意欲的でありました。彼は自らの痛みの感情について直面化するのは難しいようであり、どちらかというところを他人に見ることが多いようであります。例えば、彼の友人のフットボールの一件がそうでしょう。しかしながら彼がその強迫的な不安について真底悩んでいることは疑いありませんし、彼は治療に対しては意欲的であるように見受けられます。しかしながらわたしとしては、これらの強迫的徴候についてその本来の性質および原因など正確に理解したかどうか確かではありません。それらが他の不安を寄せ付けないための何かといった別の意図があるといったことも考えられますわけで・・。しかしながら、彼はその生活面においてはそこそこ自立しており、彼の両親に対しての援助とは別個に考慮するに値するものと思われれます。しかしながら、そうした状況においても、ジェイコブには週一回のセッションよりも多めの治療的援助が求められるかとも考えられます。

ジェイコブがわたしども「The Child Guidance Training Centre」に通ってくることの可能性はなくてはな  
いかと思いますが、もしもそちら「セント・ジョージ病院」に通うことが出来るのであれば、それは明らかに  
彼にとって都合がいいわけであります。出来ますならば、そちらで一度彼についてご高察を賜りますよう  
お願い申し上げます。

敬具

E. Or\*\*\*\*(Mrs. )

Principal Child Psychotherapist

(Child Guidance Training Centre,

120 Belsize Lane,London,NW3 5BA)

\*\*\*\*\*

■ 資料その2: ジェイコブの学校からの報告書 (日付; 1979年1月16日)

Mr. Green\*\*\*\*

Director of Educational

Branch; Borough of Merton.

Dear Mr. Green\*\*\*\*,

先刻お尋ねいただきましたジェイコブ R. の件ですが、彼は当校では「フォームRV」, すなわち一般的に標準より上とされるクラスの第四学年目に在籍しております。それで来る1980年6月までには卒業試験でもあります「GCE(全国共通テスト)」の「Oレベル」の大概の科目の受験が見込まれております。現在のところ、彼はわれわれの地域での「13+」の試験において「Cグレード」と判定されております。従いまして、彼が当校でのフォームに留まるためには幾らか今後いっそうの努力が期待されねばなりませんでしょう。

彼のクラス担任のコメントから申しますと、彼の成績は概してほとんどの科目において良いということです。科目担任のそれぞれの先生方からうかがいますに、特に経済及び歴史の先生方ですが、彼がそれら科目に興味を示しているを見做しております。そして、それについてもっと‘知識を得ようとして参考文献などを読み漁ることをしている’ようでもあるとも語られておりました。他のコメントでは、例えば‘野心的 ambitious’とか‘想像力豊かな imaginative’といった言葉もそこに含まれておりました。或る先生は、彼を‘おしゃべり chatter box’と語っております。数学そして芸術の先生が特に…。そして彼は特にゲームに熱心とは見做されておられません。

彼の指導教員(tutor)は、ジェイコブがグループのなかでは他の生徒たちにも人気があり、自分の為すべきことはしっかりやらなくてはとそれなりの気概はあるものの、ただ時としてぼんやりと上の空で気が抜けたふう(absent-minded)になることがあるとも語っておりました。

実は昨年の時期に、前任のクラス担任によってジェイコブについて報告されたものが手許にございます。この報告書には今年の先生方からわたしがお話を聞いた限りでは浮上してこなかった或る問題が提示されております。この前任のクラス担当が観察しましたところでは、ジェイコブはおそらく‘かなり神経質 rather highly strung’であり、それで、‘幾らか神経質的な緊張を克服しようとする徴候が示されること’があり、そして‘無口になりがち’といったことが言及されております。わたしとしましては、これら彼のパーソナリティーの側面についてこれ以上何か意見を挟むことは致しかねますけれども、今回そちらからのお尋ねがありましたわけですから、一応ジェイコブがわたしどもと共にあって、他の先生方からそのような指摘がなされていたという事実をここにお伝えする次第であります。

わたしはジェイコブを教える立場にはないわけですが、彼と個人的に話してみましたところでは、とても気持ちのいい、知性の感じられる、なかなか面白い男子だという印象を抱きました。 敬具

R. B. Co\*\*\* (Head Master)

Rutlish School, Watery Lane, SW20 9AD

\*\*\*\*\*

■資料その3; ジェイコブの治療の総括臨床レポート (日付; 1979年9月30日)

※秋～冬(1978/09/05～12/15);

ジェイコブは、わたしとの最初の面接に訪れた際(1978/09/05)、自らの問題について幾つか彼なりの見解を語っております。すべてがとにかく気掛かりであること。彼に責任があると思うこと。そこで彼は家の扉に鍵が掛かっているかどうかを確認します。それに、ガス栓が開いていてガスが漏れていないとか、水道の蛇口から水が垂れていないかどうか。或いは猫について始終気掛かりなのです。それには父親が献身的といえるほどに愛情を注いでおるわけですが、冷蔵庫のなかに閉じ込められているのではないとか。それから、ラジオを消したかどうか、それも2,3分前のことも記憶にないのです。そこでそれを気にし始めると、何が何でも確認せずには納まらないのです。それから学校の授業にも著しく抑制(inhibition)が働き、自由に振舞えないということがあります。例えば、化学の実験に参加できないのがその一つです。電気の差込に怖くて触れないとか、化学の薬品その他にもそれが有毒ではないかと気になって触れられないからです。そうした困難が語られたことで、彼が援助を必要としていることは明らかであり、週2回のセッションということで治療の取り決めがされたのでした。

ジェイコブの両親はわたしとの面談にそれぞれ別々に訪れました(1978/09/18&20)。どうやらジェイコブの家庭環境というのは些か普通ではないといえましょう。それぞれ家庭内に上の階と下の階との間に別々になっているようです。二階にはジェイコブと母親が住み、一階には父親(それに猫たち)が暮らしているというものです。そして過去の何年も間、この夫婦の間には辛辣なことばの激しい応酬があったものと想像されます。そしてついこうした‘相互不可侵条約’を結ぶに至ったもののようであります。それで幾らかは互いに互いが耐えられるといったふうに治まったわけであります。彼ら夫婦それぞれに何ら共通するものはないということのようです。子どもたちのことを除けば。子どもたちについてはどちらもそれぞれに愛情と関心を真摯に表明しておりました。特に父親が‘子どもたちは、自分の人生そのもの。自分の人生において得難い尊いことに思える’ (That’s my life…great thing about my life) >と語っておられたことが印象に残りました。

母親の Mrs.R は、彼女の上の息子サム(年齢19歳)が過去3年間に亘り或女性と不倫関係にあり、しかもその女性の夫というのが実際のところ彼女の恋人なのだということをわたしに打ち明けました。ジェイコブが彼の周辺でこのようなゴタゴタがあるのをどの程度承知しているのか分かりませんが。確かに、彼がわたしに不安症状のあれこれを語ったところから推察しますに、幾らかはこうした彼の身近な人々の間の乱脈な性的関係というものを敏感に察知しておるよううかがわれました。父親の Mr.R からはジェイコブの性格について、幼い頃から家族に対して「指令塔 enterprising」的に振舞うことが多かったということを聞かされました。一番幼い彼が家族の皆に指図するわけです。それから、ジェイコブが「生まれながらのアナーキスト(born Anarchist)」だと自らのことを語っていたということもわかりました。これは、ジェイコブを知るうえで重要事項の一つかと思われま。

実際のところ、最初の面談以降どうやら彼はわたしを大いに‘試した’ともいえましょう。つまり誰がここでこのセッションのなかで主導権を握っているのかといったことです。例えば、こんな話が語られました。或る店の主人が助手として雇った男について、それが店の品物をこっそり盗みはしないかと疑心暗鬼でいるといったこと…。ジェイコブは一見して気弱そうで、わたしにまったくのところ依存しているといったポーズを取っておりました。それは、‘指令塔’的な自己をまるごと放棄してしまったかの如くでありました。それというも、アルフレッド・テニスの詩「軽騎兵隊の突撃 (The Valley of Death Road the Ten Thousands)」によって長く記憶に留められることになった或る史実を、彼は想起したからなのです。それは司令官の戦略的誤算ゆえに招いた惨劇であったわけです。大砲で待ち構えているロシア軍に向かって、イギリス軍の軽騎兵隊600人あまりが何の援護もなく突撃してゆき、その半数近くが死傷してしまったという惨憺たる戦いであったわけです。ジェイコブとしては、わたしとのセッションをどのように導いてゆくのか知る由もなく、それで彼がどういうことになるのやらさっぱり分からないわけです。自分は責任持てない。だけど Miss Yamagami はどうか。わたしを信じて付いていっても果たして大丈夫かと疑念を抱きます。そこには、どうせロクなことにはならないとか、惨憺たるものになるとか、もしくは衝動的な何かが抑え難く噴出し、それで暴力を振るうといったことがないとも限らないとか、あれこれ不安が頭を過ぎります。それはたまたまわたしの部屋の窓ガラスに亀裂を見つけ、そこに恰も‘暴力’の証拠を見たかのようにひどく心乱されたということがあったからです(1978/10/02)。セッションが彼に何らかの狂気をもたらすかもしれないことを恐れておりましたし、そしてそれと同じく誰か‘外部の人間’が、彼がわたしと一緒にいることに対して何らかの羨望やら嫉妬心から攻撃を仕掛けてくるのではないかということをも彼は恐れたのであります。

或る日のこと、彼は時間を読み違い、遅れたと思い、慌ててわたしの部屋に駆け込んできたことがありました。わたしは上司(男性)と談話しているところだったのです。彼のセッション開始の5分前でしたから、わたしは彼に待合室で待つようにと指示したわけです。そしてそのセッションにおいて、



彼は画用紙の上端に登山靴を履いた片足を一本描きました(図例; 1978/10/09)。

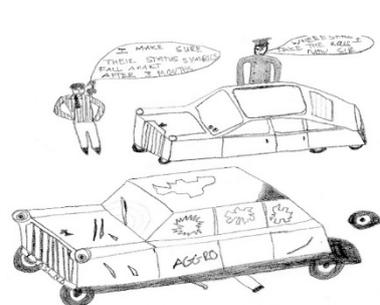
そして窓の外を眺めて、雨樋 drain-pipe があるから、屋根の上に乗るのは簡単だねと

いう話をします。もしもそうしたいならばということであって、実際自分はそうは思わないとも付け足します。わたしは何やらギョツとした

のです。いかにも所かまわず土足で踏み込む‘家宅侵入罪’が暗示されております。すなわちここにかなる‘規律’にも苛烈な反抗心が頭を擡げるといったジェイコブがうかがわれます。そしてさらに彼は次の絵を描きました(図例; 1978/10/09)。その男は株式仲買人 stock-broker であり、その手にする剣で友人の結婚式でウェディング・ケーキをカットしているところなんだとか。これは、彼の現在の家族的状況における彼自身の「肖像画」とも思われました。すなわち、両親の結婚、その愛情に向けての不信感および無関心といった態度であります。それでも彼らは現状のままに結婚生活を続けなくてはならないとしたら、それ



はそれで彼にしてみれば都合がいいわけです。つまりどちらからも金をせしめることができるという意味で・・・同じような意味合いでの「シニシズム」を表している絵「ギャンブラー」があります(図例; 1978/10/30)。爪鍵をした、サングラスの男が、



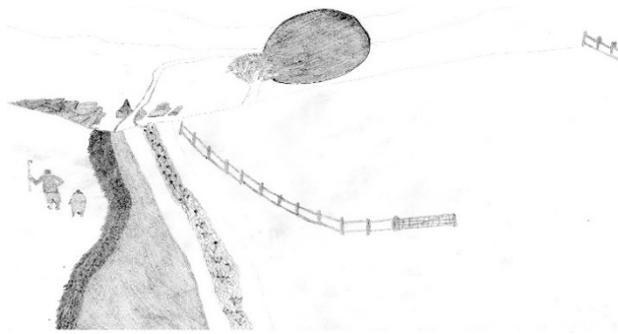
<ヘッヘッ、ありったけを分捕ってやるぞ(Heh,heh, Look at me sucking in all the Mugs)>と言っているわけです。彼の肩に乗っている鳥はハゲタカみたいな腐食動物ということ。そして次の画では、この同じ男がボロボロに破損したロールスロイスの高級車を見下ろしながら、<このステータスシンボルがいずれポンコツになるのをしっかり見ておこう>と語っております。この車の持ち主はギャンブルで身を持ち崩して自殺したということです。ざま—みろ！というわけでしょうか。敵対者への無慈悲というか、冷酷非情さはどうやら徹底しているようです。



彼が描く絵にはサングラスを掛けた男性がしばしば登場します。特に何の物語が語られるわけではないのですが。彼の言うところでは、<ちょっとした刺激、頭の中にふと浮かんだ事柄・・・>というわけです。つまり想念の‘切れ端’といえましょう。例えば(図例; 1978/11/28)、一人の若い男性は庭でシャベルを使って穴を掘っております。それはわたしを念頭においたところの彼の‘侵入的な覗き見’<sup>のぞ</sup>といえましょう。彼はわたしについて好奇心が募ってゆき、セッションという限られた関係性という限界がいよいよ欲求不満を募らせていたからです。殊に彼の性的な飢餓感が激しくなるにつれ、わたしへの占有欲はいよいよあからさまになり、同時に彼の‘競争相手’<sup>のぞ</sup>に対する殺人的な敵意といったことがはっきりしてまいります。どのようなことでも、制限を加えられることに対して、彼は我慢ができないのであります。抵抗を試みずにはいられません。それでどうにか相手を脱価値化し、誹謗中傷するわけであります。例えば、こんな具合に。もしも雄犬が道端でたまたまそこに居た雌犬(bitch=売春婦の Miss Yamagami)に襲い掛かり、性的に仕掛けたとしても何が悪い?!といったふううにうそぶくわけです。



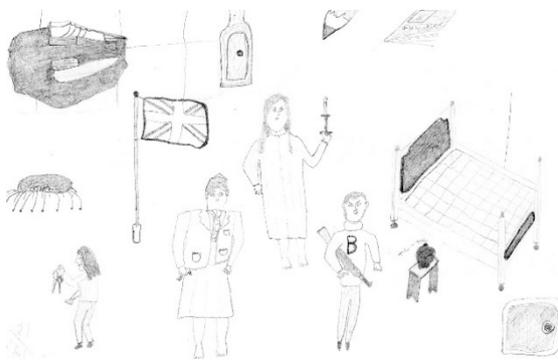
「熊さん」がズボンを履いている絵があります(図例; 1978/12/04)。その熊は或る男を切り裂いたということのようです。その男が最初に熊に攻撃を仕掛け、それに熊が反撃したということでもあります。そして男のズボンを剥ぎ取ってちゃっかり拝借したわけなのです！そこにはどうも「良き父親」というものが「コンテナ」<sup>のぞ</sup>として、もしくは指導役として必要だということをいくらか自覚されていなくもないといった印象がうかがわれます。が、そこには相反感情 antagonism があり、また‘取り入れ introjection’<sup>のぞ</sup>の困難が垣間見られるのです。しかし驚いたことに、そこからその次



のセッションにおいて、「羊飼いと迷える羊」の絵へと導かれます(図例; 1978/12/08)。初め一枚目には羊飼いがいて、その少し離れたところに一匹の迷える羊がおりました。それから続けて、別にもう一枚描きます。珍しくも構成の整った絵です。そこでは夕陽が丘の向こうに沈もうとしており、そして羊飼いは

その迷える羊を従えて、牧草地を下ったところにある彼のコテージへと帰ってゆくところなのであります！そしてジェイコブは「羊飼いは羊のことをとても気にかけて、大事に思っている (he cares for sheeps)」と言いました。満足げであり、珍しく彼は自分の描いた絵に愛着を覚えたふうでした。わたしに持って帰っていいかと尋ねたほどです。一見して穏やかで、彼のなかでのさまざまな纏れた思いが氷解したかのような印象でした。

ところが、このセッションの後すぐに彼の従兄デイビッド(15歳)が自動車事故に遭ったのです。そして彼は重傷を負い、病院に救急搬送される事態となり、ジェイコブはひどく打ちのめされ、すべてが元の木阿弥ということになったわけです。それで彼がセッションに戻ってきた時(1978/12/15)、わたし(Miss Yamagami)やらセッションやら何もかもが一挙に目の前から消失するといった不安でがんじがらめになっておりました。そして、わたしが彼のせいで憔悴ききって、それでただ床に書いて静養したいと考えているといったことが彼の絵に表わされております(図例; 1978/12/15)。同時にわたしが彼に隠しているあ



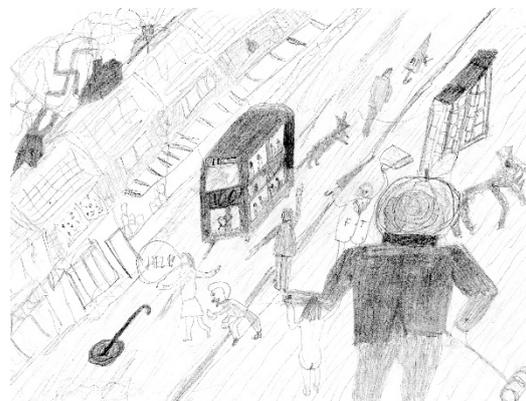
らゆるものを今すぐにも盗みだそうとする焦燥感もそこに表れておりました。男の子がガンマシーンを手に、「わたしのベッド」の傍らにある金庫の側に立っております。そこにはまた、飢えた目つきの蜘蛛が一匹描かれております。こうした「犯罪的所業」への衝動に駆られたのは、それはクリスマス休暇によるところのセッションのお休み、それにおそらくデイビッドの死ということがもはや避けられな

い事態であったことから急激に惹き起こされたものようです。デイビッドに彼はとても強く愛着し、同一化しておりました。しかしながら或る意味、彼はジェイコブにとって強力なライバルでもあったわけです。つまり父方の祖母が死んだら、その遺産を継承するといったことですが・・・だからデイビッドの死はまさに彼自らが手を下したといったふうに、混乱した頭のなかで彼は自責の念で懊悩したのでありましょう。それらがすべてセッションのなかでわたし(Miss Yamagami)への「転移状況」において克明に物語られていたと思われます。さらに絵の中で、わたしは刑務所における「女看守」になったようでありました。彼の絵の中で、鍵束を手にし、しかも裸足で警ら中といったところでしょう！そういうわけでしたから、デイビッドの死を理由に、彼はクリスマス休暇が終わるまでセッションに戻ってきませんでした。嘆き悲しむデイビッドの遺族らとともにしていたということです。まるで彼は、刑務所(もしくはお棺の中)に収容された

かのごとくであり、わたしの手の届かないところにありました。それは裏返せば、‘凶悪犯罪者’の彼からわたしの身を守ること、無傷なままにしておくことでもあったでしょう。

※冬～春（1979/01/05 ～1979/04/06）；

セッションに戻ってきた彼は、クリスマスの時期にたくさんのセッションを失ったことで挫折感やら敗北感に打ちひしがれているかのようでした。そしてそれらの埋め合わせに俄然戦闘意識を高めたかのように、（当時社会問題になっていたチェルシーのフットボールファンの乱痴気騒ぎにも似た）‘モブ・アイデンティティー’を募らせていくのでした。彼のわたしに向けて愛情飢餓は熾烈であったようで、それは彼が描く絵に表わされ



ております。例えば（図例；1979/01/26）ですが、裸の部族の男がどこか（オーストラリア）市街のメインストリートに飛び出てきて、狩猟やら強盗を働き、それで彼のいうところのカオス（騒乱）を巻き起こすといったわけです。絵の中では一人の女性が悲鳴をあげ、＜助けてえー！＞とっております。彼女はこの野蛮人に追いかけれ、あわや捕まるばかりのところでした。因みに、これは彼が風邪のためにセッションをお休みにしたその次のセッションでのことでもあります。

同時に彼の中では競争相手（敵対者）がひどく気になってすっかり圧倒されるようになっていったわけです。それは転移状況においては「誰がMiss Yamagamiをモノにするのか」といったことになります。或る日のこと（1979/01/29）、彼はセッションの初めにズボンのポケットになんとディナー・ナイフが入っているのにふと気づき、ひどく困惑します。その瞬間まで彼はまったくそのことに気付いていなかったのです。彼は学校の食堂でそれを手にして、でも使わないと分かったので、それを自分のポケットに入れたとのことです！しかしながら、彼が是非にも自己防御のために武装せざるを得ない心境にあったことはこれで明白でしょう。ほんとうに、彼のころのなかでは、わたし（Miss Yamagami）の‘スペース’はあまりにも人で混み合っており、ジェイコブの居場所など見つけることがとても難しいというわけです。週2回のセッションが充分なはずはないのです。そうした誰もがわたしに群がって食べ物だの居場所だのを求めているわけです。そして彼としては自分の順番が回ってくるのを待つということが出来ないわけで、大いに苛立っており、それでそうした面倒な輩をすべて一掃せんとするためにはいっそ核爆発をといった過激な考えに走ります。わたしはすぐさまヒロシマを連想いたしました。彼はすぐさま、核爆発はこの地球上の人口の過剰を食い止めるための解決策としては有効だと返答します。（ここでわざわざ日本に於いては・・・と彼は言わなかったわけですが。）彼はひどく自尊心が傷つけられる思いをしていたのは事実でしょう。それでかつてのクロムウエル統治下のプリンス・チャールズに同一化します。つまりすべての権限を剥奪され、政治的な迫害に身を屈せざるを得ないという状況であったわけですが・・・それでもしそれに反抗しようものならば、即彼には死が待ち構えているといったことでもあります。そしてこの闘いの場

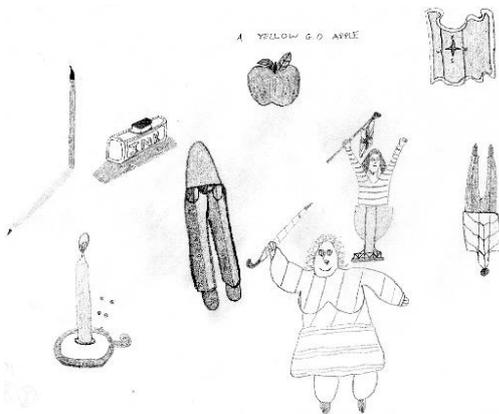
において生き残るためには、ただ‘不能 impotence’に陥るしかないということでもあります。それがジェイコブの場合ですと、「敢えて協力をしない(反抗)」から「協力しようにも出来ない(不能)」といった状態へ



と切り替わることがごく簡単だということになるようでした。彼の絵「人形遣い」にそれが鮮やかに描かれているかと思われます(図例; 1979/02/23)。人形遣い(パピット・マスター)が2つの指人形を手にしております。一人は男性、もう一つは女性。彼らは結婚した夫婦ということになっております。そこでの物語とは、マスターは彼らに性交を促す意図があるのです。それはもっとたくさんの‘パピット指人形’を得て、それでもっと興行の収益

をあげようと目論んでいるわけです。だけどそれはどうもうまく行かないということらしいです。なぜなら、この男性のパピットは「不能 impotent」だからで、そのようにジェイコブは説明します。因みに、このパピット・マスターはグロテスクで、まるで蛇のように見えなくもありません。

しかしここでもう一つ、彼が両親の性交の結果として‘新しい赤ちゃんの誕生’をひどく恐れているということがはっきりと示唆されてもいるわけです。彼は或る記憶を語っております。それは彼が2、3歳の頃、クリスマスツリーにぶらさげる飾り物のガラス製の玉を飲み込んだということでした。そしてそれがため、病院に一週間収容を余儀なくされたわけで、どれほど惨めであったかという話でした。これは、部分対象レベルでの「母親オッパイ」に対しての彼の専有欲がどれほどのものを示唆するものであり、そしてその結果としての、敵対的な「悪いオッパイ」による迫害そして遺棄といった自らの体験の記憶がしつこく彼のところに刻まれているといったことに思われます。(因みに、彼は赤ちゃんのとき母乳が与えられておりました。)復活祭が近付くにつれ、それは「交尾の季節」であり、地上では新しい命の誕生が溢れる季節を意味します。彼の操作的、侵入的、かつ‘指令塔’的な自己がますます募ってゆくようでありました。それは彼が描いた多くの絵にそれらが表わされております。その例の一つは、小さな男で、その外見はあきらかに「卵さんHumpty Dumpty」でありました。それはナースリーライム(童話)にある、壁の上に乗っていた卵さんが、転げて地面で割れちゃったというもの。つまりのところ、‘役立たずの卵もしくは精子’といったところでしょう。それからもう一つの別の絵(図例; 1979/03/19)、そこには2つ

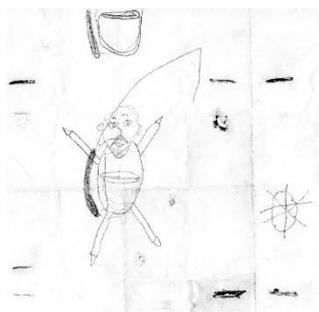


のエッグ・カップがありました。そこに一人の女の子がいて、そのからだは2つに切り離されております。上半身と下半身であります。そして特にその下半身の部分はエッグカップに嵌ったままで身動き付きません。そのエッグカップにはなんと輪が付いており、だから、それはどこへでも逃げ出してしまうことができるわけで、どこかに行方知れずになってしまうといったことです。なんというヒポクリット(偽善)、そしてなんというあざけり(mockery)でしょう！彼のわたしとの‘交尾’に向けての熱情というのは、もしも

われわれが一つに合体しない限り、彼が決して自分のものにならない何かをわたしが隠し持っているということに耐えられないからなのです。しかしながら、この侵入的かつ羨望的で強奪せんばかりの性質は、それゆえにわたしとのいかなる接触にも怯えることになるわけです。というのは、そこではわたしは‘気の狂った犬・ジェイコブ’を始末せんとする、ナチのガス室のような「報復的なヴァギナ」になるからなのです。同じく我が身を滅ぼすこの‘ヴァギナ’への怖れは、同時に「精神科閉鎖病棟」に閉じ込められるといった彼の恐怖にもつながっていることが判明されております(図例;1979/01/19)。



さらには、もしも彼が決して<良きペニス good-penis>(そして良き性交 good-intercourse)を今ここですぐにもわが手にすることができなしたら、彼はいつそのこと破壊者になるしかないというものであります。そして可能ならば、他人の「良きペニス」を殲滅するといった願望を密かに隠し持って・・彼の絵の中では(1979/04/06)、男優がリチャード三世という役柄で舞台の上で 科白<sup>せりふ</sup>を言っておりました。ジェイコブはその権勢欲といった面でこのリチャード三世に強く同一化していたようであります。その絵のなかで彼はこぶしを振り上げ、<戦だ、戦だ・・>と喚んでいるのです。そうでなければ、退屈で仕方ないというわけです！この図は復活祭の休暇に入る直前のセッションで描いたもので、これにもう一つ別の絵を置いて、彼は去りました(図例;1979/04/06)。それはイエスキリストが十字架に磔<sup>はりつけ</sup>になっている絵のようですが、彼の性器は取り除かれております。しかもその全体はまるで‘復活祭の卵 Easter-egg’のようでもあります。そしてこの画用紙はジェイコブが頻りに鉛筆の先で攻撃を仕掛けたせいで、あちこちに切り裂き傷が残っておりました。いかにもそれは新しい命の誕生、すなわち潜在的な意味での彼の‘競争相手’を愚弄<sup>おろそ</sup>しており、まあ言うなれば<くたばれ！>といったわけです。なんという呪いでしょう！



※春～夏(1979/04/23 ~ 1979/07/20)；



復活祭のお休みの間、まるですっかり殺人者の凶暴な感覚の 虜<sup>とりこ</sup>になったかのようで、彼はセッションに戻った時点で「アミン」の絵(図例;1979/04/23)を描きました。それは当時ウガンダの第三代の大統領で悪名高い政治的リーダーでありまして、弾圧やら粛清で多くの民が犠牲になりました。その権威が失墜し、彼はサウジアラビアへの亡命を企てていたわけでありまして、ところが現実にも妙な事態に陥りました。近くの医院に唇が乾いているのでその塗り薬をもらいに行っただけなのに、ジェイコブは受付に置かれてあった「慈善箱」を持ち去ったと嫌疑を掛けられ、そして警察から職務質問を受けたというのです！彼は勿論そんなことはやっていないと言いましたが、実に彼もまた‘お尋ね者 wanted’というわけでありました。ここでどうやら明らかになったことは、セッションが

ないという‘剥奪’というものを経験したことで、彼のなかで羨望やら嫉妬心がかく沸騰せざるを得ないことになり、別の誰か、わたしがどこかで診ている‘プライベートの患者’を想定し、それは彼がわたしからもらうよりも何倍ものものをもらっているといったことを思いついたのです。そして彼は週末にアルバイトをするということを言っております。彼は大真面目でした。躍起になっていたのです。彼は実際のところ必要な分は充分にお小遣いをもらっていたのですから、全然必要はなかったのですが…。しかし彼はもっと欲しいわけです。いつかわたしの‘プライベート患者’になるためでしょうか。ジェイコブは間近になっていた選挙の結果に至極気持ちが向けられておりました。恰もそれは彼の運命を決定づけるかのようでした。彼はマーガレット・サッチャーが政権を担うことになれば、医療費削減が図られるということを承知しておりました。それは個人的にはここでのわたしの患者としての権利を剥奪されることになるわけです。セッションを失うということです。こうした内的動揺が嵩じてゆき、彼はいっそうのこと世を拗ねたふうな抗議を増長させるのに、彼の‘モブ・アイデンティティー’、すなわち「パンク」やら「フリーガン」にますますかぶれてゆくわけなりました。

或る日(1979/06/01)、彼は夢を語りました。彼は列車に乗っており、乗客は誰もいなくて彼一人でした。窓の外を眺めておりますと、延々に牧草地が広がり、そこには牛やら羊そして馬などが放牧されているのが目にされました。列車はひたすら突っ走ってゆきます。どこに止まる気配もありません。そこで焦った彼は非常時用のチェーンを引っ張ります。それで列車は緊急停止しました。それで列車から飛び降り、急いで帰宅したというものです(と夢を見ながら思ったということ)…。これを<絶対‘離乳’などさせないぞ>といった宣言として取り上げました。実際のところ、彼はわたしとのセッションが終わりに近づこうとしていることに断固抵抗しているといったふうでした。そしてますますペシミズムを募らせ、そしてまたあれこれ文句を並べたてることをします。例えば<どうせぼくのことなど気にもしてないだろう…>といったしつこい恨みの感情であります。彼はわたしを「知的なロボット」だと言います。どんな励ましも同情も憐れみもないというわけです。ここで彼はお姉さんのことを思い出します。彼女はいつもとてもやさしく、考え深く、そして正しい人であり、それでジェイコブのした間違いはすべて彼女が直してくれたといったことです！でも、わたし(Miss Yamagami)はどうせジェイコブのことなど気にも留めちゃいない。もしもセッションの直後に彼が車に轢かれたとしても、ただわたしのダイアリーから予約されてあった彼の名前を消すだけといったこと。そして彼がセッション中描いたこれまでの絵すべてを処分すること。それだけってことじゃないかと語り、大いに憤懣やる方ないといった面持ちでした。

彼の欲求感情やら性欲はとても強まっており、だからこそ時折彼はまったくのところ敢えて気持ちを抑えこんで、言うなれば‘不能 impotence’状態へと埋没させてしまうのであります。<何も考えられないし、言うこともない…>と…。しかもわたしが彼に何もこれといった刺激を与えることがないからだと不満を訴えます。しかし実際のところ、彼は「言葉の剣 daggers of words」(もしくは「剣の言葉 words of daggers」と彼の頭のなかで混乱します)をひどく恐れていたのです。ジェイコブは、当時パンクロッカーであった「シド・ヴィシャス(Sid Vicious)」に深く心酔して、彼と同一化しております。その舞台での過激なパフォーマンスやら女性との乱交の噂やら、そして薬物乱用により他界したことやら…。彼は或

る殺人容疑で裁判係争中でもあったわけです。そんな彼をジェイコブは‘英雄視’していたといえましょう。おそらく同じ‘生粋のアナーキスト’を彼に見たということになりましょう。そうでありましたから、ジェイコブはセッションのなかでわたしと一緒にいる自分自身が何をしでかすか、まるで信用できない気分でした。さらにはこの時期でしたか、巷では売春婦の殺人を次々に犯す「ヨークシャー・リップパー(ヨークシャーの切り裂き魔)」という猟奇殺人者がマスコミで騒がれておりましたが、それがジェイコブの頭のなかにこびりついていたのでした。それで学校行事でヨークへの旅行があり、それを口実にしてセッションからしばし逃亡を企てたということになります。わたしにはセッションをキャンセルするという連絡を入れることはなく、無断でした。それで一回セッションを失ったわけですが、後で彼は連絡を入れることを忘れていたこと、何しろ参加の申し出をするのに時間がなかったので慌てていたんだとか・言い訳しておりましたが。

この予期していなかったセッションの中断の間に、彼は読み耽っていた或る本を読了したということでした。その本のタイトルは『わたしは伝説である』(これはドラキュラの物語です！)。そしてセッションに戻った際に彼が語った夢とは、すべて彼の家族の誰もが死んでしまった。彼を一人置き去りにして…。勿論悲しいは悲しいわけだが…でも彼自身がひとりで自らの問題に対処することに興奮を覚えた…と彼は語っております。真実、その意味するところのものとは、彼が裕福になるための手っ取り早い解決策なわけです。亡くなった家族からすべて資産および貯金すべてを継承するわけですから。それはまるで夢がかなったとも言えるべきでしょうか。彼は一人の自立した裕福な紳士なわけです。そこでどこか田舎で悠々自適に過ごせるといったことのようにです。まあ、そうかどうかは彼には確信はないのですが。ここで事実として挙げられるべきは、彼の父親が彼の親戚筋の或る裕福などなたかが亡くなった折に、その遺産を譲り受けたということがあります。勿論それがどれほど彼に気儘な生活を送らせることになったのか。ジェイコブはそれを羨ましいと思ってなかったはずはありません。自分に資産を増やす才覚がなければ、裕福な血筋の死を待つというのは実に分かりやすいことです。父親はミドル階級出身で、その母親やら親戚筋には結構裕福な人達がいたのも事実なのですし…。だがここで「ドラキュラ志願」というのはどうも感心いたしません。

これから少し経て、どうにか彼は彼の愛する家族を喪失についての悲しみにちよつとは触れられたかのようであり、そして可能性としては自分ひとりが‘孤児’になるといったことの考えが浮かんでぞっとしたのです。彼の「誰にも欲しがられない unwanted」といった感情」そしてわたし(Miss Yamagami)を失うといったことはとても耐えられないとの思いが募ってゆきました。そこで夏季休暇が近付いてまいりますと、彼はわれわれの立場をひっくり返すことを致します。つまり‘逆転劇’です。彼は休暇をわたしよりも一週間多めに取ることを主張します。つまり6週間というわけですが。それはニューヨークにいる、彼にとっては名付け親(god-mother)とかいう、とても裕福な親戚筋から招待を受けているので、母親と一緒に出掛けることになっていると言うのです。そしてここで彼はわたしに対して大いに誹謗中傷を試みます。それは、まるで‘売春婦’にたかられているみたいで、しかし彼は結構ですと頻りに断っているわけです。それでその‘売春婦’のわたしは性的に欲求不満となり、彼にめっちゃめっちゃに乱暴をはたらき、彼にあ

れこれひどい悪態をつき、自分のところに来るよにと強要するといったことです！ジェイコブとしてはくおれの知ったことか！>とそんな彼女を冷たく突き放すわけです。彼はここで改めてさらにもっと上を目指そうと野心を燃やします。いかにもハイソサイティーに初めてデヴューする‘令嬢’みたいです。そこでうまくすれば誰か‘プリンセス’か、ともかく彼のお相手になる誰かが見つかるつもりでいたわけです。そんな具合にして彼は意気揚々とアメリカへと出掛けていったというわけです。

実は、6月中に彼は「Oレベル」の試験を受けておりまして、数学は標準並み程度でしたが、他の科目はほぼすべて満足できる結果を出したということで彼は高揚していたのです。来年には「Aレベル」といったふうに取り敢えず先の見通しが付き始めていたのは事実でした。それでようやく羽根を伸ばしたということでもあったのでしょう。どれほどの安堵でしたか！アウシュビッツに到着したユダヤ人が次々に「使える」「使えない」と選別されてゆき、「使えない」とレッテルを貼られたものは即ガス室送りになるといったこと、それが真実ジェイコブにしてみれば自分の運命になりはしないかと内心恐れおののいていたのですから…。それはまた「精神科閉鎖病棟」に収容される恐怖にも繋がっていたのも事実でありまして、それも彼の混乱した頭ではなんと‘魔女のヴァギナ’に吸い込まれ<sup>とりこ</sup> 虜にされ、それで‘一巻の終わりの」といった悪夢であったわけです(1979/01/19)！

※エピローグ (1979/09/03~1979/09/28)；

彼が6週間の休みを終えてセッションに戻ってきたとき、いくらか頭のなかがなによりやぎゅうぎゅう詰めといった感じでした。だが学校も始まり、どうにか日々の暮らしを取り戻したようでした。そして彼はこれから一ヶ月弱のセッションの終わりに向けて、現実的に取り組みを考え始めたようでありました。彼は自分のネクタイをいじりながら、学校のこの時期に入学してきた新入生が店にネクタイが品切れになっていて、それでネクタイなしの制服でこなくてはならないんだけど、それがなんとも滑稽に見えるということを話します。彼はネクタイが好きなんだそうで、だから自分にはネクタイがあるから良かったと喜ぶのでした。それを、彼がわたしと一緒に一年間治療を受けられたことを有難く思う気持ちの表れとして解釈しました。彼はどうやらわたしの‘不在’に慣れるためにこころのなかで特訓をしていたかのようでありました。或る日(1979/09/07)、彼はずっと長い間じっと沈黙しておりました。目を<sup>つむ</sup> 瞑り、頭を深く垂れておりました。そして後に、自分を取り巻くものたちをじっと意識(conscious)していたと語ります。それらはテーブルとか、椅子などですが、わたしはそこにはいないんだそうです！わたしが彼と一緒にいるということは彼にとっては‘無意識 unconscious’なんだと言うわけです。わたしは彼にとって‘現実 real’ではないということでしょうか。絶対にわたしは現実なんかであり得ない？だとしたら、どうしたら彼はわたしが彼と一緒にいるではない(not being)ということ意識できるのかしらと問います。すると、その質問に対してくもしも5兆円ほどのお金を紛失したとしたら、どうしてそれを意識できると思う？>と彼は問い返します。確かに、もうセッションはない、もうMiss Yamagamiはいなくなるということは、彼にとって償いようのない、絶対的な意味での‘喪失’なのでありました。彼自身のなかに尚も保持し続けられる何かを得たということはないだろうかとわたしが問うと、彼はここで極めてポジティブなふうに、以前彼が空想したたくさんのあれこれはもはや‘瑣末’なことと感じられるということ、そして誰彼に対してただもう自分の存在

を印象付けることに懸命だったし、そんなふうには彼自身を無理矢理駆り立て、そうすることに鞭打ってきた。だけど人々はそうした彼のことをちょっと‘変な子 odd’としか見做さなかった。しかし今や彼はそうした衝動に駆り立てられることもないわけで、そして彼らに対してNo(否!)を言うことだってできるとのことでした。それに、学校の先生方は権限を持っているとしても絶対的なものではなく、そこには制限付きであること。彼を身体的に暴行したり、言語的にも攻撃したりといったことが出来ないということがようやく分かったわけで、だからリラックスできるようになり、そして彼らに対して友好的になることすらできるようになっているとのこと。そして彼は勉強にも集中できるようになっている、成績もより芳しいものになろうとしているとのことでした。そしてこれらを語りながら、いかにも安堵したふうでありました。そのうに、彼は学校に遅刻することがこの学期になってから一度もないということでした。それは彼の進歩を示す、すごいことなんだと彼は強調します。彼が前期においてどれほどその遅刻が問題になっていたかを振り返ると・・。それで自分としてはとても喜んでいるし、誇りに思える>とのことでした。確かに、彼は自分を現実に対応して幾らかまともに振舞えるようになったようであります。そしてわたしとしては、彼がようやくセラピーセッションを終える準備が整ったかのような、そうした方向に向かい始めたといった印象を覚えたのであります。

そして或る日のこと(1979/09/21)、「wanting(求める思い)」についてといったような、幾らか人間らしい感情を初めて彼が吐露したことがあります。しばし沈黙の後、ふと彼は、<ぼくのこと、誰が求めてくれているのかしら(I wonder who wants me)・・>と神妙に語り始めました。そうね、そしてジェイコブ自身は誰がいてくれたらって願うかしらねと問うと、<うん、家族がまずそうだね。ぼくはママのことを求めている(I want her)。ぼくはずうとそうだった。父がぼくのこと求めているかどうか、それってよく分からない・・でも、やはり彼は求めているって思うんだ・・>と静かな声音で考え深げに語った。それから彼はデイビッドが死んで初めてセッションのなかで彼に言及し、その思いを語ります。<ぼくはデイビッドが恋しい。とても寂しい(I miss him)。彼はぼくにとって一番の親友だった。彼という存在がどんなに自分にとって意味があったのか、自分は全然わかってなかった。彼はぼくのこと必要としてくれていたし、愛してくれていたとも思う。それを自分はどれだけ分かっていたかと思う。全然なんだ。彼を思うほど誰かを思うことなどないほどだったのに・・。誰かが自分を愛してくれているとしたら、その人を愛することはそんなに難しいことでもないわけだしね・・>。

しかしながら、実際のところ最終セッションが近付くにつれ、彼は自分がわたしを無傷のままにして去れるかどうかひどく不確かになってゆきました。全然その自信がなく、懐疑的でありました。そして彼の欲求不満、そしてどうしたらわたしを心の内に留めておけるかということで気が挫<sup>くじ</sup>けてしまいそうなのでした。それは、彼がかつて<イメージには肉体はないだろ・・>と言った、そのとおりに・・。そして皮肉的にも彼は「悪霊となったMiss Yamagami」の手の中に捕まったままで身動きならない自分をイメージするばかりなのでした。疑心暗鬼の塊りと化したかのように。すなわちわたしが彼に取り憑いて、彼の描いた絵すべて、そしてまた彼がこの児童精神科に通所していた履歴をも利用し、将来の彼の評判を損ねるようなことをするといったことです。特に彼が職を得る折に・・。それは「犯罪歴」にも似て、

彼の人生のなかの恥ずべき何か(a dirty spot)というわけです。このようにジェイコブは、痛烈で苦々しくも心がヒリヒリするような思いでいっぱいだったのです。＜どうせ先生は痛みの感情を覚えるなんてことないでしょ。無感覚だよ(You are not capable to feel pain・・insensitive)>といかにも陰鬱な声でわたしを詰ります(なじ) (1979/09/21)。それでいて＜どうせぼくなんかは、先生にとって最悪の患者だろうね。失敗例だってそれなりにいい経験にはなるんだろうけど・・>と自分のことを皮肉って揶揄したり・・。そうしたゴタゴタがどうにか整理されて初めて、やがて彼はわたしを失うことの痛みに触れられ、またわたしに対する「wanting feeling (求める思い)」にも触れられたのであります。つまりのところ、「自分のセッションの記録を一切消去して欲しい」から「Miss Yamagamiに自分のことを覚えていて欲しい」に取って替わられたという次第でした。どうやら彼の中で「心の転換(conversion)」があったかのように見受けられます。幾らかここで穏やかさが戻ってきたみたいでした。

彼はセッション中頻りに鼻をすすっておりました(1979/09/21&24)。風邪を引いたんですとか言っていたけれど。彼は自分のなかにどうしようもない気分の落ち込みを抱えていたのでしょう。終わりはもう間近だったのですから。目の前のすべてに光が失われ、闇に埋没してゆくような感覚であったのです。わたしに対しての愛着にしがみついた気分は大層強くあったのですが、しかし‘離乳 weaning’であることをどうにか悟ったようで、彼はわたしのなかに次の患者の誰かのために‘空席’を残しておかねばならないということに思いついたのです。そうでなければ、彼は彼らに‘痛手 harm’を加えることになるということでした。つまり彼がかつてそうであったように、もしも彼らがメンタルなプレッシャーのために打ちひしがれているとしたら、何らかの援助が必要だということ。ジェイコブの場合、それを既にもらえたわけですし、今や彼は自分でなんとかやり抜けると思っているわけですから、もういいと思ってもいい。だから次の誰かにチャンスを与えることにしたわけです。この時点で彼は「待合室の他の患者たち」、すなわちそれはわたしの日本での将来の患者たちということになりましようが、その彼らを自分の‘分析的な弟そして妹 analytical brothers and sisters’として受け入れられるようになったといえましよう！

わたしの後を引き継ぐ誰かと一緒にさらにセラピーの継続を希望するかと彼に問いますと、それに対して彼は、それは要らないと語ります(1979/09/24)。セラピーというものがどんなものか分かったし、これからは自分でやる(I know psychotherapy's about. I carry on myself・・)>とのことでした。何か将来問題を感じたなら主治医のDr. Fitzpatrickに相談するようにと示唆しますと、＜患者としては来ないだろう・・>とのことでした。そして冗談っぽく＜もしもいつか将来ぼくが『Times』の編集者にでもなったら、セラピーの成功例としてこちらに面会に訪れるかもしれない・・>と語りました！

そして最終セッションにおいて(1979/09/28)、彼はセラピーを振り返ります。彼は語ります。＜先生はぼくのこと‘ましな人間 better person’にしてくれたと思う。ぼくは以前だと自分のことしか頭になかった。一人で思い悩むばかりで・・。でも今ぼくは責任を持てる自分になってきたと思える。・・先生は誠実 sincere だったと思う。そしてぼくも誠心誠意を込めて、先生からご尽力いただいたことに感謝したい。ぼくのこれからの生涯はMiss Yamagamiを抜きにしてはあり得ないと思う。ずっと先生はぼくのなか

に記憶されると思う(You have been sincere...I thank you sincerely. I can't eliminate Miss Yamagami out of my life. I remember you...)と語った。<ほらね、火傷の痕<sup>あと</sup>が残るみたいに...残るんだよね...>と言い添えた。そしてさらに、<これは終わり end ではない。先生もだろうし、ぼくもこれからこの続きを生きる。つまり継続してゆくという意味だけど...>と付け加えた。そしてわたしは、ここで彼がようやくわたしと一緒にいた治療過程においてわれわれのどちらもがどれほどの痛苦を共に味わったのかを了解するに至ったのだという気がした。そして彼にとって、われわれどちらも潰れなかったということがどれほどの安堵であったかを思った。われわれのどちらもとにかく生き残ったのであります。わたしが彼を<sup>ほうてき</sup>放擲しなかったわけだし、またわたしが致命的な深手を負うといったこともなくて済んだという意味です。そして未来に向けて尚も生き続けること、われわれの過去の記憶と共に...。ジェイコブは、こんなふうに語っております。<なんだかいろんなことに好奇心を覚える feeling curious だよ。例えば、見たことのない鳥をみれば、どこから来たのか知りたいとごく自然に思うみたいに...。いろんなこと、自分がまだ知らないことがいっぱいあるということが分かったし、もっともっと知りたいという気持ちになっている。宗教とか歴史とか...>。将来彼の志す職業については、文化人類学者になりたいと語っている。歴史やら社会学がどちらかという得意だからと...。さらには、わたしがこうした心理臨床の仕事から満足を得ているのかどうか、どうしてこれを選んだのかその理由は何なのか、あれこれ好奇心を覚えたふうでした。それを知りたいという彼の思いには真摯なものが感じられました。それから彼はふと考え込むのでした。わたしの彼への'尽力 efforts'というものが、果たして「愛情Love」から来てるのか、それとも「学識 Knowledge」(専門的な意味で)から来ているのかと...。そしてしばらくどっちだろうと考えめぐねておりました。<まるで、ジグソーパズルのピースみたいだね...>とそんなふうに描写し、やがて考え深げにくたぶんね、それらって半分半分だろね>と語ります。この時点で、ふとわたしの脳裏を過ぎたことがありました。それはわたし側のちょっとした個人的な感情であり、イメージなのですが、ジェイコブが「Miss Yamagamiの'小さい弟分'のセラピスト a little-brother-therapist」になっているというものです！それでそれを彼に問いただします。すると、彼が語りますに、学校で同級生たちが折々に自分にそれぞれ抱えている問題を打ち明けようになっているということでした！びっくりです！それに彼は傾聴するんだそうです。全然退屈を感じないと彼は言います。それはおそらくこういうことでしょう。問題があれば、それが何であれ、いつかは解決する。そしてジェイコブは満足を感じることもある。つまり彼が他の誰かと何かを分かち合うといった'努力 efforts'には当然報われるということがあるということを彼が理解したということでしょう。

ここでわたしは彼が言うところの「好奇心を覚える feeling curious」ということ、「もっと知りたいと思う wanting to know more」ということ、そして自分がまだまだ知らないことがいっぱいあるということに気づき、その痛みに耐えるべく内的な格闘をしていること、そうであってこそ、いよいよ真実彼の'未来'が拓かれたと思えたのです。それは単に彼が大学へ進学することだけを意味するのではなく、また彼の生きること全般において、また人々との関係性において愛情や経験を共に分かち合うといった可能性をもまたここにうかがわれます。部屋を去る前に、彼はわたしに<握手してもいいですか>と問うた。わたしは立ち上がり、ごく自然に手を差し出した。それを彼は遠慮したふうに軽く握った。もうじき16歳になる

うとする、自分よりも遥かに背丈のあるジェイコブの顔を見上げながら、彼が一人前の‘若者’であることに気付かされ、わたしは何やら一瞬深い感銘を覚えたのである。彼もまた、これでようやく一人前扱いにされたかと安堵したのか、<有難うございました>との言葉をわたしに告げ、静かに歩み去った。鞆を椅子の上に置き忘れたので、わたしが彼にそれを手渡すという、おまけが付きましてけれども・・。

彼は母親からの手紙を言付かってきておりました。別れ際にそれをわたしに手渡したのですが、そこにはジェイコブの言葉を裏付けるように、彼にいろいろ‘進歩’が認められるという事実を語ってくださっており、それについてわたしへの感謝が伝えられてありました。わたしはとても嬉しく、これからの彼の将来がどんなふうかとても興味を覚えます。これからの道筋はおそらく彼自らが自分の足で踏み固めてゆくでしょう。

Chizuko Yamagami  
(Child Psychtherapist)

\*\*\*\*\*

## ■ 後記

ジェイコブはどうやら自分を珍奇でグロテスクなシロモノと感じているようだった。侮蔑と<sup>あざけ</sup>嘲りの的になって恰も‘見世物’として世の人の目に晒されるといったふうな・・！彼の諧謔的な自己風刺画を参照されたい(図例; 1979/03/05)。それでいてスノブ( snobbish/ 上流気取り)でクラスコンシャス( class-conscious/ 階級意識をもった)で、しかもラディカル( radical/ 急進的)でなくてはならないと言うのだからややこしい。ジェイコブについては分からないこと



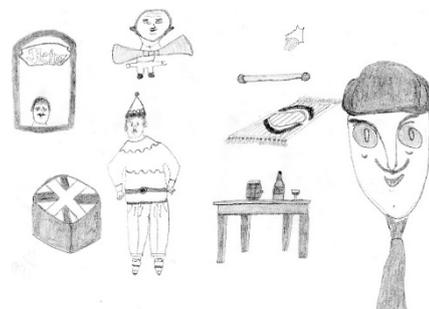
が多かった。彼の身になって彼を生きるということがわたしの想像を超えていた。徐々にそれが彼によって語られてゆくなかで、少しずつ了解できたにしろ・・。その一つは、親の出自。父親がミドル・クラス出身で、母親がワーキング・クラス出身なのだそう！2つ目は進学の問題。卒業試験であるGCS Eの「Oレベル」の試験、そしてさらに大學進学者向けの「Aレベル」の試験があり、それ次第で彼の進路が選別されること。そして3つ目は、彼がカラーブライド( color-blind/ 色弱)であるということ。これらすべてに彼の心のなかでは「差別」が絡んでくる。

その一番目についてだが、わたしには想像がつかない。ミドル・クラスとワーキング・クラスはその文化的DNA( 伝統)が違う。それぞれが引き継いでいるものは互いに‘水’と‘油’のようなものだ。決して混じり合わない。例えば、ミドル・クラスは「人は人、自分は自分」を信条とするだろうし、ワーキング・クラスは「人と人との繋がり・連帯」を重視するだろう。一事が万事何もかも違うのだ。身に付けた言語、そして振る舞いの一挙一動が異なっている。彼らは互いに互いが耐えられない。だから居酒屋でもパブと

サロンというふうに‘仕切り’がある。そうであってこそそれぞれが居心地いい(comfortable)と感ぜられるのであるし、差別してるとか差別されている意識はおそらく皆無といていい。そもそも互いが互いの視界に入っていないのだから・・。そうだとしたら、ジェイコブの両親の‘家庭内別居’というのは実に自然の成り行きといていい。だがそれに至るまでの何十年もの間の混乱(双方の‘階級闘争’と言換えてもいい)は、彼らの子どもらにどう映ったかということはかなり深刻な問題を孕んでいたと了解される。

父方の親戚筋との付き合いは結構頻繁であるらしい。父親は親戚の誰かが死亡した際に遺産を譲り受けていたりする。彼らに自分たちとの格差を見せ付けられることは多かろう。ただ一つ残念なことは、この父方の家系にはオックスフォード出身者がいないんだそうだ。だから、スノッブでクラスコンシャスなジェイコブがそれを狙ったとしても不思議ではない。我こそはと名乗りをあげたい気分なのだろう。だが、それならば彼は今居るコンプリヘンシブ・スクールに居てはダメだろう。友人らと一緒にディスコに行くとかフットボール観戦にゆくとかいうのも違う。彼が彼らと一緒にでも常にここに居るべきではない自分を感じていたのは事実。さもありません！そして、たとえ将来オックスフォード大學に入れたとしても、彼の出自からして他の学生との格差に悩むことは必定なのだ。親たちが彼の行く末をどう考えていたのか定かではない。ミドル・クラスの子弟はパブリック・スクールに入学する。従兄のデイビッドがどうだったか気になる。ジェイコブも気にしていただろう。

彼は自分以外の誰かに自分の運命を決められたくはない。だが、「Oレベル」の結果に好成绩を示すことができなければ、完全にアウトなのだ。その次の大學進学のための「Aレベル」試験も断念しなくてはならない。その成績結果は一生付いて回る。後の就職にも・・。彼が狂わんばかりに懊悩したのも分かる。「生まれながらのアナーキスト」と自らを呼ぶところの彼は、自分に対して「生殺与奪の権」を握る権威、学校の校長始め教師たちに密かに敵愾心を燃やす。まるで夢遊病者の夢うつつのなかで‘阿修羅’の如く敵対者に楯突き、抗う。だが事実としては結構彼は学校では人気者だと言う。それは「道



化の仮面」を被っているからだ(図例; 1978/11/10)。敵愾心を相手に察知させまいとして、そんなふうに相手を懐柔するのに躍起になっている。彼は<集中できない・・>と嘆く。それはそうだろう。‘仮想敵’はどこにでもいるのだから・・。それに気を奪われて、自分がすっかりお留守になっていた。悪夢ばかりが執拗に彼を‘鞭打つ’。例えば事実として歴史に残る、イギリスの17世紀の清教徒(ピューリタン)らへの宗教的弾圧が熾烈であった当時そのままに・・(図例; 1979/03/23)。

それに、彼はカラーブラインド(色弱)だということ。それは偶然、彼の鉛筆画に何か使えるかと思って、わたしが色鉛筆のセットを用意したことで判明した(1979/03/23)。それについて本人以外の誰もわたしに語ってはいない。勿論それが将来彼の職業選択においてデメリットになるかもしれないのは分かる。だが、それが‘異常’とか‘障害’といった言葉で括られるようなものではないはずだ。だが、こうした‘選別’は彼にとっては破滅を意味する。かつてドイツのナチは彼らの規範に沿わないものは殺戮処分してもいいことになっていた。精神障害者、知的障害者、そして同性愛者など。その範疇に自分が振り当てられることを恐怖していた。あまりにも事はリアルだったのだ。飽くまでも‘メジャー’であることに執着し、‘マイナー’であることに自己嫌悪するばかりであるとしたら、それは救われない。

色弱(カラー・ブラインド)について言えば、一つ興味深い偶然事があった。わたしはDr. ドナルド・メルツァーにこの症例のプライベート・スーパービジョンをお願いしていたのだが(1979/03/16~06/25)、或る時ジェイコブの色弱について触れ、それを問うたとき、メルツァーは<自分がそうだ・・>と色弱であることをわたしに語っている。それ以上のことは語られていない。彼を知る重要なヒントになると思った。例えば、殊に「小児性欲」といったことがそうだが、その猥雑さそして猥褻さを語るうえで、彼には臆するところがまるでない。そのものズバリの仮借ない描写力がある。われわれには見過ごしにされるような微細な陰影を逃さない。逸早くキャッチするその感覚の鋭さはメルツァーを措いて他に誰もいない。抽象化という虚飾を排し、徹底的に具象的でリアルなのである。例えば、ピオンとの比較でいえば、彼が「コンテイメント(containment)」と言うところをメルツァーは「トイレット・ブレスト(toilet-breast)」と言うように・・。

メルツァーがそうだからというのでもないが、われわれ一般色覚の持ち主とは違う、色弱者独特の‘見え方’があるということに大いに感じ入った。とにかく明るさ(濃淡)の違いやら形状の違いなどの感受性が痛く鋭いのだ。ジェイコブの作画もそうだが、ディテールが凄い。その描写力にリアリティーがある。このずうっと後の話だが、わたしの元患者に色弱の方がおられたが、彼の語る夢のディテールには舌を巻いた。それに構成力が秀でていて。或るプロの写真家で色弱の人の作品を見たことがあるが、その構図が抜群にいい。だからそれは確かに何らかの一つの‘才能であることをわたしは疑わない。だがそれをジェイコブには言わずに終わった。それがどのような現実なのか、彼が生きてゆくなかでしか分かりはしないのだし。だが色弱であることで選別されるその現実を「社会の不条理」と捉えるばかりではだめだろう。とにかく「被差別者」にならないことだ。メルツァーもそうだが、多勢に与せず、独自色をうち出した生き方が希求されよう。メルツァーいうところの<私の流儀 on my own>にこだわり、それを貫くことなのだ。

セッションのなかで彼は、差別される身の上を慨嘆し、そして鬱憤を吐き出した。転移状況のなかで・・。わたしが何も分かっちゃいないということにどれほど苛立ったろう。<先生は何も痛みなんか感じはしないだろう。無感覚だ insensitive・・>と毒づいた。それが1979/09/21である。ところが最後のセッション(1979/09/28)ではわたしを真心がある sincere として感謝しているのだ。これが不思議といえば不思議だ。何故に彼のこのころの向きが変わったのか。コンバージョン(conversion/回心)という言葉

があるが、よく宗教的な意味合いにおいて語られる。神への背きから神への立ち還りに180度心の向きが変わるといったこと。それ迄まるで見えていなかった自分が見えたといったふうに・・・そして心理臨床のなかでもそうした一瞬があるとわたしは思う。ジェイコブがわたしをinsensitiveと詰ったとき、それを彼はあとで心の内で反芻したのだろう。そして否！という声を聞いた。＜違う、そうじゃない。彼女はinsensitiveでは決してなかった。むしろsincereであった・・・＞と。さらには、insensitiveなのは自分の方だと・・・そんなふうに自己が自己において自己を映した、その瞬間があったのだろう。痛みを伴って・・・そしてわたし(Miss Yamagami)が傷ついた。わたしを傷つけてしまった。そう思った彼が‘償い’をしようとしたのであったろう。そして自我妄執から解き放たれ、まるで憑き物が取れたかのように、彼は心穏やかになった。

彼がわたしについて語った‘sincere’という言葉で一つだけ思い当たることがある。それは、彼の資料について私が解釈するほとんどが「小児性欲」についてであり、その猥雑さそして猥褻さにわたしが果敢に切り込んでいったこと。メルツァー譲りというか・・・そこで使われる言葉には野卑で聞くに耐えられない下品なことが結構あった。「fecal-penis」やら「whore-vagina」とか・・・普通の神経では腰が引けてしまう。だから、時折ジェイコブは呆れて、信じられないといった顔をしてわたしを凝視することがあった。私が‘クレージーcrazy’に映っただろう。だが、どこかそれが彼にフィットしたとも言える。小児性欲の猥雑さそして猥褻さ、それこそが「いのちの根源」であるのだから、それでどうやら彼のいのちが息を吹き返したとも言える。もはや継ぎ接ぎの‘張り子人形’でも誰かの‘パピット(操り人形)’でもない、自分をそのままに‘いのち’としてリアルに掴めたかのようなのだ。

だが、勿論のこと、われわれ両者に於いて経験を分かち合うという観点からして、＜われわれはまったく生きてる世界が違う。先生の言われることは何万里も遠い彼方のことにしか聞えない・・・＞と彼はわたしに毒付いた。まさにそれはそのとおりだろう。彼は悩んでいた。日々の暮らしのなかでのこと、両親のいさか<sup>いさか</sup>諍い、学校の成績の低迷、今にも将来の夢が完全に断ち切られると恐れおののいていたのだから・・・でもそんなことは正直わたしには分からない。わたしに分かるのは彼のなかの小児性欲の極まった混乱であり、それで「わたしの土俵」に彼を連れ込んだことになる。どれほど不満だったろう。わたしはその遠い隔たりの向こうの彼に、まるで電報文を打つかのように発信を続けたのだった。届くかどうか危ぶまれたけれども・・・でも、どうやら幾つかわたしの語る言葉たちが彼に届いて意味をもったようだ。転移状況は動いていたし、共存しているといった手応えは充分あった。互いに‘応答可能性’を手探りしていたと言えよう。そのお蔭かどうか、‘土壺<sup>どっほ</sup>に嵌っていた’彼はとにかくそこから這い上がったのだ。振り返ってみて、やはりああするしかなかったのだと思われる。そもそも彼が「否認している事柄」をどのようにしたらわたしは理解したと言えるか。そしてそのわたしの理解をどのような「精神分析言語」でなら彼に伝えられるか。それが精神分析の<sup>かなめ</sup>要となる。それで患者の立場で彼がわたしに「理解された」と思えたとしたら、それはどうしてだろうか？この謎こそが大きな眼目である。

さて、彼の作画だが、彼の脳裏に過ぎた想念の断片的イメージが次々に登場する。まるで 泡沫<sup>ほうまつ</sup>のように…。大概のところ、そこに全体的に一貫したテーマを探すことは難しい。靴を履く片足だったり、右翼っぽい、サングラスの男たちだったり…。刀剣だったり銃器だったり、ミイラだったり、国旗だったり…。それに戯画化されたキング、そしてクイーンがいたり（図例；1978/06/20）…。餌をもらっている猫たちも登場する



し、そして家の中をチーズを探してうろちよろしているネズミもいたりする。ジェイコブはくこれらには関連性はない(They are not connected)と語っている。実にそのとおり。この繋がり(関連性/linkage)をずたずたに断たれた想念の切れ端は、ジグソーパズルのピースのようにそこらじゅうに散乱して寄せ集められているだけで、何か統一した意味を成すことはない。実際のところ、ジェイコブは自らの思考の道筋(track)が一向に辿れないことがあると彼自身率直に認めている(1979/05/14)。それらは確かに‘折り合いの悪い’彼の両親そのものとも言えよう。だが、一つはっきりしていることは、(何か誰かが)繋がりすなわち関係性を持つということは、彼にとってはすべて性的な意味合いを含む‘交わり’になる。例えば、彼の絵(図例；1979/03/19)にそうした交わりがいかに剣呑であるかが示唆されている。その物語はこう。或る貴族の夫婦がいて、また別に彼らに雇われているゲームキーパー(猟場番人)の夫婦がいる。その横暴で専制的なご主人はゲームキーパーを顎で使う。たとえ真夜中でさえも彼に使い走り



をさせる…。それで彼が家を留守にしている間に忍び込んできてゲームキーパーの妻とセックスをするというわけ…。つまりいかなるコネクションも‘不実’を孕んでいるということになる。だから彼はいかなる交わり(connection)をも一様にスナッピング(snapping)、つまりバラバラに切り刻み解体することに躍起になるのだ。現実には母親の恋人との関係がいかなるものか、彼が知らないはずもなからう。「リトル・エディプス」としてのジェイコブにしてみれば、「カップル」に対抗する意識は苛烈にならう。

そしてそれもようやく最後のセッションで、彼は問うた。わたしの彼に対する惜しみない援助は Love(愛)故か Knowledge(知)故か、いずれかということ。それで考えあぐねた結果の彼の答えはくそれは半分半分だろうね…>だった。これは、Well done(上出来)！である。それら「愛」と「知」をどうにか‘関連付けられた’ことはジェイコブの成長の証として評価したい。<関係ない…おれの知ったことではない…>とはもはや言えない。「愛することが知ることであり、知ることは愛することだ」という理解を得るに至ったということだろう。それも自らの内なる「Wanting 求める思い」が動機づけとなっている。

そしてそれもようやく最後のセッションで、彼は問うた。わたしの彼に対する惜しみない援助は Love(愛)故か Knowledge(知)故か、いずれかということ。それで考えあぐねた結果の彼の答えはくそれは半分半分だろうね…>だった。これは、Well done(上出来)！である。それら「愛」と「知」をどうにか‘関連付けられた’ことはジェイコブの成長の証として評価したい。<関係ない…おれの知ったことではない…>とはもはや言えない。「愛することが知ることであり、知ることは愛することだ」という理解を得るに至ったということだろう。それも自らの内なる「Wanting 求める思い」が動機づけとなっている。

従兄デイビッドに対してのように、人との交わりをいとおしむこと、そして過去に交わった人を懐かしむことが可能になったわけで…。誰かを求める自分であったり、また誰かに求められる自分でもありたいとの願望が芽生えた。デイビッドに繋がる思いは他へと拡がった。そしてわたしに対しても…。かつて‘求める自分’そして‘求められたい自分’のナイーヴさを<sup>あざわら</sup>嘲い、一蹴する彼がいた。だかもはや冷血漢やら道化を装うことに疲れたし、飽きたともいえる。それは彼にとって「非本質」だから、そして無意味だから…。<It's not true(それは違う)>という内心の声に耳を傾けたのだろう。彼の本質はそれとは別の何か。そして、ついに彼はsincerityに辿り着く。愚直にも求め続けること、そのナイーヴさが彼の「本質」だと彼は知るに至ったともいえる。

彼の両親間にあった「階級闘争」、その水と油のように反撥し合うだけのものに、‘潤滑油’みたいに「sincerity」が彼のなかで浮上した。新たな導きの糸として…。因みに「sincerity」とは、アメリカの思想家 R.W.エマーソンの提唱するところであり、彼はそれと並行して「self-reliance(自己信頼)」という言葉をも残している。わたしはジェイコブがようやくにしてこの自己信頼というものを手にしたのではなかったかと思う。それは両親から引き継いだ課題でもあったろう。親たちの自家撞着(antagonism)を超克し、ジェイコブはおそらく今後彼らを牽引してゆく力ともなろう。彼のこころの内なる「結合両親像 combined parental figures」は今後さらに試されてゆくであろうが…。「家族愛」はまだ完全に色褪せてはいない。親たちにも子どもらにも‘付き合ってゆける、付き合ってもらえる’お互いへの期待感はいずれ蘇るであろう。「関係ない！not connected」から「つながった！connected」へ向けての転換。ここに深い安堵がうかがわれる。その彼が最後別れるときにわたしに握手を求めたのは、象徴的に繋がり(結びつき)への一歩を踏み出したということであり、そこには樂觀がうかがわれるといっべくよからう。

ジェイコブはまだまだ片付かないものを引き摺ってゆくだろう。彼の語ったくぼくの生涯においてMiss Yamagamiを消すことはできない>ということとはどんなことを意味するのかしら。わたしには分からない。だが、彼が己の本質性に根付いた人生を選ぶことが出来て、それが彼の値打ちを十全に発揮し得る何かであることを祈りたい。

(2018/03/25 記)